日本妙神始

序詞 天照大神に奉る。四月九月の神御衣は。和妙の御衣廣さ一尺五寸。荒妙の御衣廣さ一尺六寸長各四丈。髻糸頸玉手玉足玉の緒のくり返し。神代の遺風末の世に惠をおほふ秋津民。千早振袖廣戈の國平けく御す。天照大神の御孫。天津彦火瓊々杵尊と申すこそォロヘ代々に王たる。始なれ。地久方の日の神の御影映りし八咫の鏡。是を見る事吾を見るが如くせよとの神勅にて。民恤みの仁の道。百王の後迄も内侍所と崇められる。地さて又御先祖伊弉諾尊より御相傳の十握の寶劍。これ勇の形義の理。御叔父素盞嗚尊猛く勇める御器量とて。此の寶劍を預り王を後見ましませば。神慮に不測の禮智あり三種の寶の神德に。家に樂み野に耕し。手拍つて謠ふ土民迄。式を越えざる玉垣のフシ内つ。御國ぞ道廣き。地三十二臣の棟梁藤原の大祖天津兒屋根の臣。御前に正笏し。詞王既に寶祚の御位。天下萬民の父母たる御身。夫婦妹脊の道缺けては王道いかゞ行はれん。御心に入り御目につきたる女あらば。夜の御座に召入れられ然るべしと奏聞あれば。地恥かしけに御顏を打赤め。二柱の御神始め給ひし夫婦の道。色を好むは僻事ながら。詞去年の冬豐明の燎の影。垣間見し面影の身に立添ひて忘れず。地露のかごとに名を聞けば大山祇の臣が娘とや。深山の立木野邊の草蹕かぬ方はなけれども。引くにひかれぬフシ戀草の。種を誰かは植初めしと。貴き曉しき戀の辯スェテ浮世。恨みの御詞。兒屋根の臣を始め伺候の群臣一同に。詞こは勿體なき御咄ち。

近松門左衛門作

何事か御心に叶はぬ事や候べき。折しも大山祇御前にあるこそ幸ひ。御分の息女御宮仕へに參らせ。叡慮を慰め申されよはやはやお受けとありければ。大山祇謹んで臣娘二人持ち候へども。姉岩長姫は容貌醜く不束にて。心まで拗々しく。親の目にさへ疎ましき生れつき宮仕へは思ひもよらず。妹木花開耶姫容貌心ざま姉と變り。地女の數にも入るべき者。宣旨違背候はじと勅答も終らぬに。鰐香背の臣といふ奸曲の佞臣。高遣戸荒らかに引明け大山祇の前にどうと坐し。詞これ山祇。御邊が性根はあるかないか胸の中を搜して見よ。開耶姫には忝くも。素盞嗚尊御心をかけられ。此の鰐香背の臣がお使にて御所望ありしは何とく。娘を天子へ上げたくば上げて見よ。又素盞嗚尊へも上げさせて見せんず。地度性根を定めよと御前とも憚らず。袴の裾けはらかし禮儀をくづして責めかくる。詞大山祇ちつとも臆せず。いはれぬ人の性根穿鑿。先

づ御遊が性根あるかないか腸を搜して見よ。尤も娘御所望のお使は得たれども。素盞嗚尊に契約は申さず。其の時御遊が辯舌御身に深き大願あり。御本望達すれば舅君と仰がるゝ。後の果報を思へなどと勸めしかど。兎角娘は進ずまじと申し切つたを忘れたか。但し御遊と契約せしか。其の時の魂あるやいかに。ヲ、契約した程ならば口でいうて置かうか。よし契約はありともなくとも一旦答へはある筈。天子の叔父君後見たる。素盞嗚尊を侮るか。此の鰐香背の臣を侮るか。地あなづる太刀の刄鐵を見るかと既に柄に手をかくれば。兒屋根の臣聲をかけ。同ヤア〳〵恐れを知らぬ鰐香背。理非はともあれ宮中にて。太刀に手をかけ無禮の振舞。上を輕しめ奉る其の科。據なし。地刄を以て人の肌斷ち傷つけ殺さば。國津罪科にしづめよと天照神の御制法。中臣の家に承つて此の兒屋根の臣がきつと罪に行はん。誰、あるあれ儺ひ出せと棟梁の臣の凛々たる。威勢の聲に吃驚して。流石の鰐香背大口すぼめ。蛭にしを〳〵退出す。フシ面目なうぞ見えにける。地かゝる所に美濃の國の造早馬に汗かゝせ。蹄をとばせ庭上に大息つぎ、同さても本國殯山の巖窟に。三熊野大人と申す。惡鬼隱れ棲み。百千の眷屬村里にあふれ。青山を枯山にし人民に毒氣を吹きかけ。惱まし苦め人の命をとる事毎日千首餘り。早く討手を下されずば。人種は候まじと奏すれば。地上下の男女驚き。恐るゝばかりなり。地王宸襟を惱され。天照御神高天原にて。もろ〳〵の惡鬼惡神を誡め給ひ。長く我が國に仇をなさじと誓ひの手形を顯して。鬼神に横道なしと聞く。今國民に害をなすこそ不思議なれと。地神璽の御箱を開き給へば。天津兒屋根進み寄り。幡印の一卷八座の机にさら〳〵と。フシ繰披げてぞ叡覽ある。地異類異形の鬼神の手形鳥の足蛇の爪。或は人に似たるもあり螢火のかゞやく惡神。蠅聲疫神邪神。鳩槃茶夜叉神藍婆神。此の神國に害をなさじと惡鬼惡魔の手形の中。三熊野大人といふ手形更にあらざれば。いかなる變化の所爲ならんとフシ疑ひ恐れ給ひけり。地天津兒屋根につこと笑ひ。同恐るゝにたらず此の手形に洩れたるは、必定新羅百濟の異國の邪神蘆原國を窺ふなんめり。武勇に猛き素盞嗚尊を以て。平け鎭められんに何事か候べきと。速日の臣を勅使として素盞嗚尊に宣旨あり。惡鬼退治の大將の印に賜はる御旗に。照輝ける月と日も。同じ胤なる皇の御代に。住む身ぞ三重かけまくもフシ忝くも。地日の神の御弟素盞嗚尊御身の長八尺。力千人引の岩を轉ばし猛く烈しき勢ひに。邪を碎き仇を討つこと暮秋の嵐木枯の。フシ草木を破るに異らず。地惡鬼退治の宣旨に任せ。軍慮をめぐらす小車の錦の着長銀の心葉。角髮に取つて付け韓鋤の御佩刀。太手襁に白木綿かけて千箭の箙。榛の弓を弓弭高にふりたて。天の斑駒白泡嚙ませオクリゆらりと召せば馬の背も。たわむばかりのコハリ御骨柄。侍從の童天稚彥十八歳。主君に劣らぬ不敵者。御馬の左に引添うて三

千餘騎が隊伍をみださず。日月の御族眞先に八十縫の白楯つき立て。〳〵。しつとりしと〳〵打つたるは花待つ雲に雨を帶び。暮山を出でたる御勢事も愚や出雲の國大社。むすぶの御神又は祇園牛頭天王。厄神拂の荒神と。末世に顯れ地給ひしは今此の。フシ尊の御事なり。地後陣の方よりなう〳〵御馬暫くと聲をかけ。鰐香背の臣一文字に駈來り。轡取つて引きとめ。詞さて〳〵不覺の御出陣。知し召さずや兒屋根の臣威勢にほこり大山祇をたらし込み。木花開耶姫を天子の女御に供へ。君に鼻あかせ萬民の笑ひ草として。天下の後見叔父君の威勢を落さん謀。御預りの國の寶。十握の劍も取上げられ給はん遠駈の御留守。地開耶姫を内裏へ入れては君御一生の御恥辱。臍を嚙むともかひあるまじ。是非御歸りと鞅攫んで一三間引返す。左に立つたる天稚彦轡にすがつて待て〳〵〳〵。詞こりや不吉者。惡鬼退治の軍の門出。一寸でも返すとはおくびにも出さぬ忌詞。忌々しい聞きたくない。兒屋根の臣が權柄に。我が君の威を落さんかとはそりや其の時。地なんぞ今から海も見えぬ舟用意。惡魔もひしぐ素盞嗚尊。臆病神にひかされ道より逃げて歸りしと。末代の嘲り煮ても燒いても遁るゝか。詞殊に宣旨を背く誤り叔父君とて御免はない。地分別過ぐれば愚にかへる初一念に御進みと。轡の承諾ゑいと摑んで四五間引いて引出せば。詞こりや〳〵〳〵。こりや天稚彦。汝が腹中せばい〳〵。此の鰐香背が大腹中。地宣旨を背く御咎めあるこそ幸ひ。それを序に御謀叛すゝめ瓊々杵尊の御位をほつ下し。此の君を天子と仰ぎ開耶姫を后妃に立て。天津兒屋根を流罪に沈め某棟梁の臣下となり。政道を施さば天下に暗き事あるまじ。是非お歸りと馬引立て引返す。詞いやや君を討つておのれが名利を貪るか。地さうはさせぬと又引出せば コハリ又引戻す。兩方腕骨限りぞと。引いつ引かるゝ梓弓弓杖三杖。四杖の間野邊の若草ふみしたき。駒厩ふ聲ゑい〳〵聲。人馬の足音どろ〳〵どろ。引けば返し返せば引き。寄る方わかぬ蜃小舟。汐の落合逆波に。ゆられもまるゝナホス如くにてフシ駒も四足を立てかねたり。地尊大きに御氣色かはり。馬上より天稚彦をはつたと睨み。詞天も轟く御聲にて推參なりわつば。丸が心も伺はず悄し過ぎたる利口だて。瓊々杵尊は帝王なれども天照神の御孫。我は弟先祖に近き此の素盞嗚尊。秋津島において肩を並べん者誰かある。心をかけたる女一人。地望みかなへず何と我が身の思ひ出にせん。宣旨を背くなんぞとは外の事。戀路は緣の物何の咎めあるべき。今夜惡鬼降伏の爲八咫の鏡の祕封を解き。御戸を開き諸人の參詣許さゝゝ。開耶姫が詣でぬ事よもあらじ密に内裏に忍入り。奪ひ取つて本懷遂げんそこを放せと鎧の鳩胸踏みそらし。靶取つたる腕首はたと蹴放し。いさうれ小童と馬立て。なほし手

綱も戀に紅のもみに揉うてぞ三重へ暮急ぐ。フシ月も眞澄の。御神鏡惡魔降伏の御祈り。今夜始めて御戸開き寶燁く瑞籬に。御神樂探物うたひ物御魂の鏡世を照す。磐戸開けし始め迄爰に覺えて君と臣。心も合に大山祇の妹姫。姿容貌は名に顯れて是ぞ木花開耶姫。此の日の本の寶物拜むといふも稀の事。心の障りない樣に姉樣へは沙汰なしに。いざとて局腰元や中居なんどをお供にて。賢所に參詣あり。スエテ忝しと正直の。其の一節を御注連繩。フシ神も受けさせ給ふべし。心しづかに姫君。幣奉り再拜し。詞なういづれも能う拜みや。あの眞中に月日の如く。照輝かせ給ふこそ御鏡と申す物さうな。地右は神璽の御箱左の箱は十握の御劍。則ち三種の神寶物。詞中にも八咫のお鏡は正眞の天照太神樣。萬の願も叶ふと聞く。地いかなる御緣か帝樣より。自らに度度の御玉章我とても恐れながら。貴なる君がおいとしう思ひ沈みし戀の海。天津兒屋根の奏聞にて內裏へ召さるゝ筈なれども。詞姉岩長姫樣の法界惜氣が邪魔となり。地何のかのとて遲なはる姉樣の氣が和らけば。自らが戀も成就する邪險なお心やむ樣に。立願賴むと宣へば。早苗の局が御尤御尤。詞岩長姫樣のお根性のわるさと申し。私はじめ眉目のわるい女子も多けれと。扨も〳〵念頃に見度もない。お顏ならとりなりなら交りなしの本惡女とはあのこと。慮れて進ぜる男はなし滅多腹が立てのわんざん。どなたの御意見でも聞入れの有る氣質でない。地賴むは神樣サア、腰元衆も願かけやと力をつくれば姫君も。猶伏拜み〳〵顏ふり上げて。詞ヤア是は不思議なあれあれ。地御神體の中に此の世にござらぬ母上樣。年月經てもお顏は忘れぬお年もよらず。みづ〳〵と若やいで。唇は動けどもお聲は聞えぬ。自らを憐み神の惠みで見え給ふか。慮慾な姉君に意見してたべ母上なう懷しやゆかしやと。鏡とは名を聞くばかり世にひまらねば見始めの。向ふ我が影映るとも。白木綿かけし神前はフシ涙憚る哀れさよ。地御拜も終り瓊々杵尊若し彼の人や詣でしと。高殿の御簾押しやり叡覽あり。姫はそれとも瑞籬に打ち傾きし後姿。御覽もあへず御心騷ぎどん〳〵轟く御胸は。神樂太鼓の現なき形は八咫の鏡の中。爰にといはぬばかりにて。映り向ひし御俤。あれ戀しき君よと飛立つばかり抱付かんも手は留かず。折られぬ花の開耶姫あるにもあられず是申し。詞及ばぬ雲の上人樣恨みと申すも恐れながら。姉に妬まれ責められ憂き目辛き目。地神を祈り歎くをも。憐みの御心なくなま中にお姿ばかり。お詞もかけられぬはしたゝるいがお嫌ひか。あつさりがお好きならどうなりと御意次第。いとし可愛のお文は。誠かほんか覺えてかいのとの給へば。君も憧れほく〳〵と首肯き給ふ鏡の影。詞ムゝ其の御心底なれば。忝うて猶戀しいのびく〳〵なはこちやいや〳〵。地今宵は館へ

歸らず夜の寢殿に只一夜。枕もいらぬお褥のはしに宿かりたいとざゝめけば。君もせかるる御心穗に顯れて聲たてぬ。繪に書く柳糸櫻。うなづき合ひつ招き合ふ戀は　ッシ昔もなまめかし。地早苗の局もどかしくアヽ辛氣。詞口でばかり濟む事かお側へ寄つて抱付いて。地仕やうもやうもありそな事と氣をもめば。地いや待ちやゝ合點がゆかぬ。あれが誠の

我が君ならば。召したる衣の襟付が右前の筈。左前に見ゆるは外より映る影ぢやもの。エ、ほんにだまされた。地抜かれてのけたと氣も脱けて。人々とほんと月夜に釜の二度恨む後より。爰に〳〵と勅諚の。御聲をしるべにふり返りハァ是ぞ我が戀我が思ひと。走寄りすがり付き。言の葉もなく。科もなく。互ににつこりにこ〳〵瓊々杵尊。笑顔と笑顔打ち重ね引き寄せだき寄せ締寄せて フシ几帳にまつはれ入り給ふ。地局を始め腰元下婢。こほれかゝり乘りかゝり覗きさゝやき羨むも。女心の殊廉物見だけきが フシ色ぞかし。誰が斯くとも。岩長姫。我に隱れて妹が内寓へ參るは曲者と。衣打ち被き只一人。御殿を見れば女房達奥を覗きひそめく體。扨は妹めと帝と寢くさつたエ、妬ましい羨しい。見屆けておのれ引裂いてくれうものと。うつほ柱に身を隱し閉くとも知らで女房達。詞此の事構へて姉御へ隱しや。もし耳へ入つて怖い顔に嗔恚もやさばなうこはや〳〵。地さりとは違うた御兄弟。妹君は天下の美人姉御の面は何に似た。詞齒口に蓮切鼻。狹眼に鉢額。耳は木耳。顳は蠟螺殼。舂尻に鰐足あるきぶりは家鴨の所知入。物ごしは破れ鍋あの樣な惡女と。夫婦になる男はよく〳〵の運の盡き。それでも枕をならべて側にがさりと寢たらば。地毬栗頬髭いばら髭。どさ打ちおろしの荒莚。雁木鑪鮫肌。突く樣で。刺す樣でしつくりぼつくりがつくりしやつくり寢返り フシ打つたら寢られまいと。地どつと笑へば岩長姫。詞ヤイそりや誰が事ぢや。ま一度ぬかせ。地顳蹴て〳〵蹴放さうと御殿もゆるぐ雷鳴聲。わつと平伏し女房達。世直し〳〵桑原と フシ生きたる心地はなかりけり。詞うぬらは暇な任せに人の顔の講釋か。よう妹を連れて來て姉の戀の上荷はねさせたなあ。地わらはが大事の戀君とぬく〳〵寢させて置かうかと。走廻るを早苗の局いだきとめ引据ゑ。詞これ岩長樣たとへ賤しき土民でも。身を慎み世を恥づるは女の嗜み。大山祇の臣の姉姫爰はどこぞ大内。人の訕りを思召さぬかあさましや。人のいふが誠かうそか偽りのない天照大神の。御魂に顔の映るを見給へと。地各取付き押立て〳〵八咫の鏡にさしむけたり。コハリあら恐ろしや虚靈不昧の德に照らされ。内心如夜叉の相顯れナホス鏡に映る惡鬼の面。眼は酸醬牛の角上下の牙は劍の如く。見る人はつと氣を失ひ フシ暫し。絶え入るばかりなり。地我と我が身の鏡の影始めて驚く氣色にて。あきれ果てゝ見えけるが。詞ヤイ局。鏡に映るわらはが顔は何と見た。アゝ形ばかりは人なれども心の鬼のしるしには。惡鬼に見えしといふより早く飛びかゝり。地髻を掴んで膝にひつしき。エゝ口惜しや神明の幣に。詞四大五臓を探され正體見られし腹立や。地生け置いて己れら人に語れば我が身の仇と。兩の腕ゑいと引きあけ。二つにさつと引裂きしは フッ薄紙裂く

が如くなり。地なう怖やと腰元下婢身の毛を立てて逃げ惑ふ。ヤァ逃ぐるとて逃がさうかと。大手を擴けて追廻はす フシさましかりける勢なり。地折しも天津兒屋根の臣奉幣に參りかゝつて。詞此の有樣見るよりつゝと駈隔て。ヤァ心きたなし岩長姫。妹なれども開耶姫は后妃の位恨み妬むも恐れなるに。剰へ宮中といひ三種の神器の尊前にて。神も君も憚からず法を知らぬは畜類同然。汝も大山祇の娘ならずや。恥を見ぬさき罷出でよとはつたと睨んで怒り給へば。岩長けら〳〵と嘲笑ひ棟梁の臣何ともない。討たれうが斬られうが。本望遂げずば動かぬと睨みかへす瞳の光。地人間ならぬ鬼畜の相扨こそ變化ごさんなれ。いで物見せんと掛卷も。畏所に駈上り神鏡抱き奉り。頭に捧げ口には天津太祝詞。悪女が眉間に差向け差當て。千早振る。〳〵和光の稻妻閃き渡つて。岩長姫の瞋恚の巖も碎くるばかり。五體を縮め身をふるはし。驕慢我慢の勢ひ絶えてよろ〳〵と。足弱車の廻り歸れば追立てられ。追廻し〳〵。又立戻ればおう〳〵大床 フシさして追下す。地かゝる騒ぎのあるぞとも。知らでや素盞嗚おのづから。戀に フシ揉まるゝ御姿。開耶姫を奪取る迄と人目を包む通路の。門も築地も飛越えて恐るゝ關は恐れなく。もしもや我を咎むかと驚く物は風の音。忍ぶにつらき月影のさしもに猛き御心も。わりなき思ひにかきくれて妻よりや入るべき。彼處よりや入るべきと前後に迷ひ立ち給ふ。殿上臺盤の方に叫ぶ聲しきりにて。恐ろしや凄しやと。逃出づる上臈を袖に控へてこれこれ。詞いかなる騒動氣遣ひさよと宜へば。なう申し岩長姫は變化にて。誠は鬼の正體顯れ早苗の局を引裂き。御座の間近く入らんとせしを。兒屋根の臣樣御鏡を以て追拂ひ。地御殿の騒ぎなう怖やといひ捨て散り〴〵 フシばら〳〵にこそ逃出でけれ。詞ムムウ扨はきやつ丸が討手を蒙りし。美濃の國の悪鬼が化身よな。退治延引の間を窺ひ十握の寶劍を盜み。此の日の本に劍の威德を削らん爲の悪魔の所爲。丸が預る寶劍を盜まれては末代の不覺。蘆原國の武勇の破滅我が恥辱と。地寶殿に駈上がり御箱の祕封ゐいやつと捻切り。御劍を御身にしつかと携へ。サァ神通自在もなさばなせ寶劍は渡さじと。獨りごとして在す處に。思ひもよらぬ雁中より天稚彦つゝと出で。詞内裏に悪鬼顯れしと承り。御跡慕ひ駈着け方々尋ね申したりいざ還御と申しける。ヲヽ出來した〳〵。一大事は此の寶劍。汝供奉し館に納め油斷なく守護し奉れ。地丸は此の紛れに開耶姫を奪取り。追付け伴ひ歸らんと。うたてや御劍をやす〳〵と渡し給へば押戴き。詞君しろし召さずや彼の悪鬼と申すは。天にあつては雲の八衢に棲み。地にあつては八方八隅に遍滿し八色八面の悪蛇。此の寶劍を奪はん爲。大山祇が娘と生れとつくに取るは易けれども。相剋にまし

ます鏡の威光におされたり。地八萬年が其の間念をかけたる此の寶劍。望み叶ひし嬉しやな岩長姫は我なりと。いふ聲も山彦の鬼女と顯れつゝ立ちたり。尊いらつて牙を嚙みェ、口惜ししたばかられし。八萬年の望なりとも半時持たせ置くべきかと。御怒りに顏色もあら〳〵すさまじや荒神の。天の蠅切拔きそばめ。禁裏雲井の樓閣の。神殿本殿廊下渡殿御階のもと。切りかけ〳〵ほつ詰められて通力の。電光石火水の月。前に顯れ後に消え。震動雷電頻りにて。内裏も虛空に遡るかと兒星根の臣を始として。雄走の臣速日の臣。三十二臣四方を堅めもらさじ物をと詰めかけたり。惡鬼が身より火焰を放せば尊の劍の電光。恐れて虛空に飛上り。孟其の高さ七多羅樹たとへ天地はくつがへるとも。取つたる劍は返すまじと。逆手にとつて柄頭より。ナホス地鬼一口に呑むぞと見えし。コハリ朝拜殿に尊あれは齋機殿に惡鬼あり。齋機殿に聽入り給へば新嘗殿に惡鬼あり。新嘗殿を追詰め給へば。殿上畫の御座ナホス夜之寢殿を行違ひ追廻し。惡鬼の叫喚尊の雄詰。太刀音足音ゑいや聲大地も裂くる三重へばかりなり地惡鬼が飛鳥の翻りをなせば。尊は射る矢の早業猛く。髮に追詰め兩腕切り。彼處の詰りに兩臑雍ぎ。踏伏せて首打落し。太腹胸骨五體を八段に切砕き。腸をずた〳〵に切りさばき見給へども。呑んだる寶劍あらざれば勇みに勇む素盞嗚の。彌猛心の力もつきフシあきれ。果てゝまします處に。コハリ魔風どつと梢を鳴らし。切離れたる八つの死體うごめき出でて集り寄り。一團の火焰となり寶劍をひつ包み。霹靂渡り鳴渡り。ナホス車輪の如く舞上り。フシはためき閃めき飛んで行く。地尊は身をもみ拳を握り翅なければ飛行なき。虛空を睨んで立つ空に。雲を卷込む颷風さら〳〵〳〵どう〳〵〳〵。四大海のあら波の。天にさか卷く如くにて其の行く方は天さがる。カカリ國の果島の果海龍王の棲家まで。探し求めず置くべきかと無念の涙。はら〳〵はら〳〵。兄弟の月讀日讀も照覽あれ。寶劍を取らずんば都に歸らじ地は踏むまじと。誓ひを堅め踏堅め。踏んだる土や粗金の金鐵の德備つて。強きを破り剛きを割り。硬きを碎く午頭天王。末世の惡魔疫神を防ぐ。神威ぞ有りがたき。

第二

地萬古目前の境界懸河渺々として巖峨々たり。山復山何れの工か青巖の形を削り成せる。水復水誰が家にか碧潭の色を染出せし。天より降りし殯山見上ぐる峯も森々と。萬木雲を貫けば月日の影も日に見えぬ。フシ鬼栖む山ぞ恐しき。地厄神の首領三熊野大人眷屬部類の惡鬼邪神に圍繞せられ。黑雲に跨り坐し。猛虎の吼ゆる如き大聲にて語つて曰く。詞扨も蘆原國の始め天照大神に責付けられ。我等が類人民に仇をなさじと。手形の誓ひなしけるに。地我其の時は八重の汐合に隱れ棲み。彼の手形に外れし故。

此の度當國當山に住居し。風水山嵐霧霞と變じ。人民に邪氣を吹きかけ惱まし煩はしめ。氣をのみ血を喫るに日本人肥えて血の味あまく。眷屬の汝等まで腹を膨らす事唐土天竺に勝る。詞然るに素盞嗚尊といふえせ者。討手を寡りあれ〳〵あれを見よ。麓に數萬の軍兵鏃を揃へ。鋒襖を作つて攻上る。そも素盞嗚なればとて何程の事あらん。地通力自在は此の度水を卷上げ火焔を降らし。身を隱さば芥子に入り。顯れば天に跨がり。軍兵蹴殺し踏殺し。力立する天稚彦が細首引き抜手足をもぎ。尊を捕つて八ツに引裂き梢に曝し。日本を魔國にせん。勇めや進め眷屬ども。怨々やつと喚く聲。雲に谺の木の葉を鳴し。麓に響く関の聲。石を降らせて雨交り土風山風三重一セイ〳〵尊の眤近天稚彦。抜駈の功名し目を覺ましさんと夕闇に。地物の具取つて肩にかけ。同じ毛の甲の緒をしめ。コハリ丈なる駒に鞭くれて。舎人も連れず只一騎。陣所を出でて鬼神の棲む繁みを目がけ歩ませたり。春雨の足もしどろに雲深き。地嶮岨巌壁九十九折。謡俄に吹來る風の音に。駒は頻りに高嘶きし。地フシ身顫ひしてぞ立つたりけれ。詞ヤア怪しからぬ空の雨風。鬼殿そびをかはるるな。ムヽそれ好いた面白いと。地鎧ふんばり鞍かさに突立ち上がり大音上げ。詞只今先陣の若者を誰とか思ふ。忝くも天地同體の御神。伊弉諾伊弉册の尊の御子。天照太神の御弟神武勇力の譽れある。素盞嗚尊の膝下去らず。天稚彦とは我が事。手形外れか手形を背くか。三熊野大人蟲とやらんに見參せん出合へやつと呼ばはつて。地山を睨んで控へしは。如何なる天魔疫神もッシ恐れつべうぞ見えてけり。地山はひつそと靜つて答ふる物は嵐の音。エヽ聞いた程もない鬼ども。一疋も面出しせぬは天稚彦が怖いか。出でよ〳〵と乘廻し〳〵乘据ゑてひらりと飛下り。詞折角寄せても先陣の證據なくては後日の不覺と。地指添抜いて引上げしは フシ釣瓶を釣つたる如くなり。地太刀を逆手につけども斬れども手答へなし。さしつたりと取直し切つて放す忍びの緒。主は大地へどうと落ち。甲は雲間に引入て。虚空にどつと笑ふ聲 フシ山も。崩るるばかりなり。地臆病の癖高慢者。鰐香背松の荒皮押削り。腰指の石筆嚙濕し。今月今日當山に先陣をかくるといへども。詞臆病の鬼ども一疋も出合はず。近頃弱味噌鬼味噌の汁かけ鬼。喰殘す殘念々々。地素盞嗚尊の御内。天稚彦十八歳と フシ大文字にぞ書いたりける。地時に山谷鳴動し。コハリ古木を吹折る一嵐頭の上に落ちかゝり。一丈餘りの鬼の腕朱ぬりの熊手といひつべく。毛は金銀の針ばり〳〵。甲の鉢をナホスむんずと攫んで引上げたり。ヤアしほらしい引かれはせじと兩足しつかと踏みしめて。鐵に手をかけうんと留ればゑいやと引く。ゑいや〳〵おう〳〵わんと引いつ留つつ人力魔力。暫し勝負は粗金の。土を離れて

大きに賺を立て。天稚に先陣越されし奇怪と。軍勢引具し一散に馳來る。詞軍大將を出し抜き制法を破り。抜斷せんとは推參と聲を荒らげ罵れば。いやさ手柄は仕勝ち。味方同士の廣言いふ手間で。鬼に向つて一句も出るか聞きたい〳〵。地ヲ覺えがなうて大將がなるものかと壹越調をかすりあけ。詞抑惡鬼追討の勇將。素盞嗚尊の執權。軍大將鰐香背の臣とは我が事なり。名を聞いてさへびつくりせう。顯れ出でて怪我せうより。怖くば何奴も出るなといかめしけに呼ばはれども。フシ胴はわな〳〵顫ひけり。地諸卒を下知して天稚彦。さしつめ引きつめ射かくる矢先。惡鬼も堪へず髣の梢かしこの雲間。異類異形に身を變じ。土石を飛ばせ火焔をはなち。人畜兩陣入亂れ火水を散らして三重へ挑み合ふ。地寄手は大軍四方八面に切立てられ。鬼だまいにくわつ〳〵とフシため息ついてぞ控へたる。地其の中より犢牛の二疋づれ。鐵杖提け三熊の分身隱れなき。詞滅鬼積鬼といふ早業。鰐香背が名乘りやうしやらくさく人臭く。鼻がひこ〳〵香しゝ。サア出て勝負せい。地汝等が世話にいふ如く我等が煎餅嚙む樣に。がり〳〵嚙んで呑まんずと大口あいてぞかゝりける。詞に似ぬ鰐香背がた〳〵ふるうて逃げんとす。天稚彦草摺とつて引戻し。詞敵に聲をかけらるゝは弓矢とる身の好む所。軍大將のお働き見物せん所望々々。地一戰と突出されてふるひ〳〵抜合せ。二打三打うつと見えしが。滅鬼積鬼がちらつく早業。打立て〳〵ぼつ立てられ。エヽ血醒い鬼どもむさい〳〵とかいふつて。味方の陣へ逃入りしをフシ笑はぬ者こそなかりけれ。地勝に乘つて追かけ來るを天稚隔て渡り合ひ。上段下段に斬結び。飛鳥の翼の手を碎き。弓手馬手へ切散らしをめいてかかる眷屬ども。得たりやおうと聲をかけ。當る者を幸に落花微塵に三重へ斬散らす。フシ大將三熊。地三尖二刀の鋒かる〳〵と横たへ。づしり〳〵と搖ぎ來る。詞鰐香背きつと見るより何でも髣は思案所。彼奴を討つて天稚に鼻あかせ。今の面目雪がんものと。胴をするとも齒の根が合はず。間近く來ればびつくり狼狽。アヽ〳〵待ちや〳〵草鞋の緒が解けたと。屈むる弱腰むづと取り。うんと差上げくる〳〵と振廻し。大地へどうと打付け餅にかうよと見えるが。天稚すかさず飛びかり只一討と振上ぐる。太刀の柄むずと摑んで引寄せ兩の膝に引敷いたり。ヤアどつこい汝に敷かれうかと。跳返さん〳〵と揉合へども。大磐石を負ふ如くフシ眼も飛出るばかりなり。地素盞嗚遙かに御覽じ百獸の洞の内。獅子のたける如くにて一文字に駈着け。三熊が頂を攫んで輕々と差上げ。岩壁にどうと打付け胴骨をしつかと踏んで突立ちあがり。怒れる御聲にて。詞汝いかなれば我が國に溢れ出で。岩長姫と生をかへ。丸が預り奉る寶劍を奪取り。神國の寶を失ふは國を傾けん爲か。丸が勢

を押へんためか。庭上にて呑んだる寶劍。地何國にか隱せし出せや出せとはつたと睨み。退散魔軍の御足にかけ。寶劍出せと踏付け給へば。通力自在の三熊も天孫自然の威力に押され。苦しげなる息をつぎ。詞あら畏れあり何故にか。此の國の神寶を奪ひ奉るべき樣更になし。彼の寶劍と申すは出雲の國簸の川上。鳥上の嶺に億萬劫を隱れ棲む。八岐の大蛇と申し。一身八頭の大蛇奪ひ取り。鱗の皮肉に隱し置く。彼の大蛇を滅し給はば寶劍再び神寶となり給はんこと疑なし。地全く我等が奪ふにあらず命を助け給はれと。はら〳〵零す血の涙。鬼の泣くのは人よりも フシどうずけなうて哀れなり。地尊あざ笑はせ給ひ。詞當座の命を遁れん爲。丸を欺く愚か〳〵。汝が奪はぬ證據を出せと踏付け給へば。ア、申し申し御疑ひ御尤さりながら。天地の間の惡鬼惡蛇。同類同性とは申せども司る役々に變りあり。我等は疫神の首領四百四人の眷屬ども。人間に四百四病を與へ。業の盡きる命は取り。非業の者は殺し申さず。神は正直鬼神には横道なし。世界の人が無病で死なぬ例もあれ。微塵も僞り申さず末世末代の人間。尊の御名を稱ずる者守護神となり申さん。地今の一命お助けと首領が頭を下げければ。在合ふ眷屬一同に。御免々々と泣く聲は。數千疋の犬狼 フシ一度に吼ゆるが如くなり。地尊得心まし〳〵ヲ、いしくも申したり。助くべき物ならねど。詞寶劍は八岐の大蛇が取りたると。告知らせし恩賞に依つて眷屬に至る迄。此の度の命を助け置く。重ねて我が國に仇をなさじと誓ひの手形。地天照神の御神制に任すべしと。肩骨つかんで投退け給へば。有難し〳〵命助かる手形なら千枚でも致さんと。眷屬どもゝ活々と喜び勇み跳ね廻る。 フシ鬼踊とも云つつべし。地△鰐香背天稚聲をかけ。詞ヤア〳〵御前なるわ靜まれと。地一紙の卷物着 到 硯一疋づつ罷出で。名乘つて手形仕れ。○あつと答へて歩みくる オタリしらが。交りの蓬が髮。杖に縋つて フシ屈み腰。地△彼奴は鬼のコハリ家老かや。いかなる病の神やらん。○さん候某は冬の雪の夜秋の霜。寒氣の折々蟲となり。鰐香背殿の腰の廻り。御見舞申せしお馴染の痴氣の神。御見忘れは曲もなし。當代人間賢しくして胸へ上れば橙の實足へ下れば ふじ三里灸と鍼とに行方なく。近頃慮外なナポス小袋に屈みまするとと顏しかめ。手形捺してぞ フシ入りにける。フシ△次に出でしは目の内まで。眞黄に染まる朽葉色。木の葉衣のうらぶれて黄なる涙に袖濡れしを。天稚きつと目利して。疑もなき黄疸神。汝の手では判の色も違ふべし。念を入れて手形おせコハリ○扨も見脈お見立の奇なるかな妙なるかな。別けてはどうも口なし色。只御推量お吸物。我等が禁物名を聞いても蜆汁。殼も怖いあら怖やと手形捺し〳〵押分けて。ぶり〳〵慄ひ出でたるを△鰐香背早く聲をかけ。我

も目利は劣るまじ。邪氣瘧の眞最中と。見た目は三寸ナホス違はせぬ フシいかに〳〵と問ひかくるコハリ○いや〳〵大きな樂違ひ。某は中風の神名は半身と申す者。桑の箸さへナホス左の手 フシ口をゆがめて入りにける 地△續いて見えしは水膨れはつたり〳〵腹の皮。可笑しさこらへて天稚彦。言はねど水腫脹滿神 二人申すに及ばぬ鬼の口とつてかも瓜山牛蒡。藥喰の其の印おせばおす手に水たりて。判も薄墨片隅から亂れ髪にして切りかけ。氣へん〳〵と咳上げて。鉢卷水鼻誰やらん。 地○されば候 某は。暑や寒やの風の神。手療治の生薑酒敗毒散に追出され。一汗さつと流れかゝりし橋杭の。悔の八千度百度も フシ送られましたとコハリ捺しにける。其の外癰疔腫物の一統。虚勞陰去火動神。腹痛頭痛の頭神。念雜念病内損外損。脈内瘧癘の神に至るまで殘らず手形を顯せば。卷軸は首領の三熊。左右の大手をしつかと捺し葦原國の人民は。無病息災延命と。ナホスいふ聲ばかり一紙に殘り。立舞ふ霧の殭山惡鬼は。ノシ消てえ失せにけり。 地尊は猶も御威勢の。慶賀の聲や勝鬨の。 謡聲に打添ふ松の風。〳〵靡く草木や日月のナホス簇を。なびかせ三度〳〵歸洛ある。フシ尊の御威勢。 地隱れなく天津兒屋根の臣勅諚蒙り。梓河原に平張打たせ。文武の下司左右に從へ棟梁の臣下の預り。天の逆矛屋形紋の錦に恭しく。其の身は床几に悠々と フシ尊を迎へ待ち給ふ。 地先陣の天稚彦いきりきつて走り付き。 詞ハア兒屋根の臣の御出かと棲敷の前に膝をつき。君此の度惡鬼を鎭め御凱陣隱れなく。悅びの御迎へと相見え。御念入る段御苦勞千萬。いやはや近國の悅び。お通りの道筋。土民姥嘆童までが御恩のため道を淸める。箒よ土よと足を空に駈廻り。所々の領主郡主が出迎ひ〳〵。一樽を捧げ御馳走。御内の我々迄行先の御酒で道捗參らす。此の棲敷尊あれより御覽じ。又隙取つては都入延引す。先へ走りて斷り申せとの仰せ。兎角御隊のとれぬ樣に。一刻も早く御歸洛あるが御馳走。ざつと御悅のお盃ばかり。お吸物など御無用。諸軍勢も認めよし。何にもお構ひなさるゝな。はれやれ大きなお心遣ひ。 地ヤはや御族の手の見えたれば御馬も近付き候と。聲もはやり雄素盞嗚のお馬も進む神の音。凛々たる威風 フシあたりを拂つて見えにける。 地天稚かくと坡露申せば手綱を控へ。 詞是迄の出迎ひ過分々々。思ふ儘に惡鬼を鎭め國靜謐推量せられよ。片時も歸洛急ぎたく殊に凱陣の路次。馬上用捨に預らんと。乘出し給へば天津兒屋根飛んでおり。端出の注連繩渡して道の眞中を遮り。尊に向つて大音上げ。 詞和君も二柱の御子。天照神の御弟なれば御存じの事ながら此の注連繩は日の神窟を出で給ひし時。我等が先祖此の繩を引廻し。又な窟へ入り給ふなと奏せし故。神も此の繩越え給はず。長く此の國に留り給ふ御注連繩。 地サアならば越えて

見給へ都の方へは一足も叶ふまじ。日月の御族を渡し遣き韓國根の國へも。逐電あれと案に相違の顔色。尊を始め諸軍勢 フシ呆れ果てたるばかりなり。尊馬より下り立ち給ひ心得ぬ事を聞くものかな。詞誤りあつて越ゆるならば。法を越え制を背くとも謂つゝべし。宣旨に任せ惡鬼を鎭め手形をせさせ。凱陣する素盞嗚何事か誤る。踏越えて入洛せんサア來れ軍兵と。既に御足を上け給へば兒屋根の臣太刀に手をかけ。詞ヤアこれ〳〵。誤りなしとは猿の頬笑ひ身の上知らず。美濃の國の惡鬼退治を功に立てられんとは愚か〳〵。其の爲にこそ日月の御族を預け軍勢を付けられし上は。それ程の手柄はなうて叶はぬ筈。シテ葦原國三の寶の其の一つ。十握の寶劍和君の好色戀慕より。化生に奪はれ給はずや。地既に出陣の時此の寶劍取らずんば。帝都の土は踏むまじと。天に仰ぎ地に向つての誓言はサア。覺えてか忘れてか。誓ひを背き手ぶりで歸つて神の式を越えんとや。僅か細き繩なれども一筋是を引く時は。内あり外あり上あり下あり四方あり。繩を取れば内外上下の別ちなく。闇も同然是。一心を表する繩。心に注連を引く時は。主從親子忠孝禮義の別ちを知る。是を別つを神ともいひ人ともいふ。分ち知らぬを鳥類。畜類と フシ名付けたり。今畜生の數に入つて越えたくば越えられよと一言四海を覆ふの詞。道理かな末代日本文武の政を司る。攝政關白の元祖。春日大明神と顯れ給ふは フシ兒屋根の臣の御事なり。地誠の道理にせめられてさしもに猛き素盞嗚も。雲を放れし雷の桑の立木に挾まれて。苦しむ形も斯くやらんしを〳〵として詞なく スエテ差俯。向いておはします。詞鰐香背族竿取つて搔込み。アヽ正直過ぎたり我が君。常々申すは爰の事。帝の爲に親同然の御身がら。開耶姫の戀慕もいふことか。息もつかせずまだ寶劍が足らぬとは。悉皆帝の使ひがらし。地下郎下人を雇うても禮をいひ賃を出す。德もなき無駄働き同じ手間では此の御族を押立て。棟梁顏する兒屋根の臣を討つて捨て。直に都へ斬入り瓊々杵帝を追下し。君御位に卽き給はゞ。后も寶劍も居ながら天下は御心の儘ならずや。エヽ言ひがひなき御所存や。御謀叛思し立ち給へと鰐が魅入りし惡性根。尊殆ど打頷き。馬引寄せよ族上けよと御謀叛の フシ氣さし顯れたり。地天稚彦鰐香背が持つたる族竿ひつたくり。御膝元につゝかゝり大地を叩いて。詞エヽ〳〵口惜しの御所存やな。厄神どもに手形をせさせ給ひしは昨日今日。其の手形は何の爲。日本の人民を惱ますじ。國の妨致すまじとの手形ならずや。今御謀叛の思ひ立。天下を覆すは國の妨け民の煩ひ。鬼畜に劣りし御心。地甚深不覺の了智を具へし兒屋根の臣を輕んじ。蟲同然の鰐香背風情に言廻され。天

孫の御身を危ぶめ給はんあさましさよ。御爲大事と存ずるゆゑ。慮外の詞御免あれとスエテ涙を。浮め申しけり。地尊大きに御氣色損じ。詞ヤア諫言だて聞きにくし。鰐香背は命にかへての忠節。己れは命を惜み軍を恐れ。忠節に托け身を遁れんとの諫言。地卑怯者臆病者と御足にはつたと蹴散らし給へば。起直て鰐香背が襟髪摑んで引きよせ胸板に乘りかゝり。心元を三刀四刀刺通し。返す刀を其の身が鎧の引合せ。肋をかけて突込んだり。士卒あわてゝ駈寄るを。詞ア、寄るな〳〵と押留め。假屋の方を後目にかけ。愚人千人萬人より兒屋根の臣の思召。黄泉の底迄恥かしゝ。地命を惜み軍を恐るゝ臆病とは。餘りなる仰やな。十一歳の春より片時お側を離れず。宮仕へ申せども斬く情なき御詞。遂に耳に觸れもせず。非道の御謀叛に討死せば。なんぼう命フシ惜しかるべき。うぬが身を立てん爲惡事を勸むる鰐香背を。君忠臣と御覽あり。詞我等は不忠佞人と見て討つて捨て。腹掻破り命を捨て諫言申す。地臆病者の所爲を御覽ぜ。我が君なうと諫言は磐石の。詞は重く一命はフシ露より輕く消えにけり。地天津兒屋根も兩眼に感涙をかけながら。尊の前に突立ち。詞此の御矛と申すは。女神男神の御代を治め給ひし天の逆矛の御形。執權の家に預り傳へ。國の賞罰是にあり。地尊の科を今打つ杖。姉御神の御手を貸し給ふぞと追取りのべ。丁々礑々打つや現とも。夢とも分かず茫然とフシ忽ち。御心顛へり。地しさつて逆矛頂戴あり返し捧ぐる御族の印。輝く日月と。共に晴行く御心をフシ諸卒もあつとぞ感じける。地尊盡させぬ御落涙。兒屋根の臣の誠の杖。天稚彦が忠義の死骸。我が父母の敎も此の上のあるべきか。寶劍を取返し身の誤りを解くまでは。供も連も賴まじ只我一人身を懲らし。形を苦しめ心を痛め。雨に打たれ嵐に臥し天地の責を受けてこそ。罪も少しはフシ晴れやせん。

暇申すと出で給へば。兒屋根の臣も悼はしさ破れし賤の蓑笠。旅の舍と參らすれば。スエテ共に涙の雨よりも。天を恐るゝ竹の笠。昨日の冠引替り國を憚る菅蓑は。今朝の錦の移り果て。高き位は時の間に賤の奴と寶れ行く。猛くさとしき力にも。押すに歪まぬ逆矛に。打たるゝ君が非を改ため。臣は諫めて打つ杖の盡きぬ。名殘や溢るゝ涙包むにあまる雨雲の。立ち別れても天地の。との道の末直に引く。注連縄や永き代の人の。掟となりにけり。

第三

藍葦原や天地人も開け初め。榮えにけりな逆矛の。雫の玉水のかゝる時しも生れ來て。民も豐に耕せば稻は八握にナホエ粟地蔡も。賑ひ優るフシ秋津洲や。地吉備の國の百姓食保の長が總領。巨旦將來近鄕一の田地持ち數多の家子下男。まだ東雲の暗がりより引出す牛に犂や。蹴けて出づる鋤鍬の苦は人間も變らめや。巨旦將來養子宇賀石

いざなひ。油斷きせぬ人使ひ。詞ヤイ〳〵男ども。田も畠も喰ひさいた樣で捗がいかぬ。樋の口通りの八反田今日晝までに鋤きしまひ。山つゞきの麥畠水溜めるな。畦々へ鍬入れ隨分水に油斷すな。地麻も追付蒔き時分東の岡に鍬の刄を絕すな。茶園の草引け大豆小豆の芽を雉子に喰はすな。苗代の鳥追へ。童郎どもは牛の食物事かゝぬ樣に堤緣の草刈れ。詞これ宇賀石百姓の子は小さうても。ぞべ〳〵と旦那顏して埒明かぬ。地尻引裳ゲ籃擔げ大根引いて持ち習へと。何の用捨も七つ子の裾ねぢ上げ。跳でつき出す太股は フシ引く大根より細からめ。妻の五百機走り出で。詞何程大事の大根にて彼の子が引かねば叶はぬか。地五年以來夜泣して色惡う瘠せる子を。風に當て露を踏ませて好いものか。內との者ども早う往けいとし者を何の畠へやりましよ。これ奧へいて暖かにして遊びやゝいのと押し遣れば。詞いや〳〵育てが甘さに病者になる。只養ひしようより畠に立たせ。烏威しにでもしてのけたが地よいわいと。愛敬なき夫の顏見る目の中は涙ぐみ。ア、今更いふではなけれどもつれないさもしい心かな。夫婦の中の子ならば嘿寵愛を見るやうな。弟御蘇民將來樣の獨子を養うて。胸腹はかはけれども水入らずの甥子ぞや。育てに物が入る事の。父御樣の養ひのと。弟御の田地も上田殘らずねだれとり。詞其の上に奢者榮耀者。讓の田畑も失うたと。耳も聞えぬ父御樣へ弟御を讒訴し。地親子中を割きながら。さらばこなたが孝行でもある事か。着類食物不自由な目を見せまして。罰も冥加も思はずか。地殊に我が身此の如く懷妊身持ちになりしより。人とも水とも知れぬものを總領に立てたさ。詞宇賀石の疎ましく科ない子を憎みたて。生けうが死なうがあるなしに育てゝは。地人は愚か草も木も雨風を防がねば。色よい フシ花は咲かぬ物。地蘇民樣は兄親と蟲を殺し給ふとも。嫉の恨世間の口夫の慙毀包むゆゑ共に邪險の浮名をとる迷惑は我ひとり。詞田地も返し弟御の身代立てば。父御の孝行其の身の威勢であるまいか。地眞實の意見する者は女房ならで外にない。少しは聞入れあれかしと諫め。かねてぞ泣き居たる。ヤア詞聞きともない又しては同じ事。人に褒められ兄弟思へば損がいく。弟の蘇民將來が道だてひろいて貧乏かはく。此の巨旦は人が憎み讒つても持つたが病。仕合せと親父は聾何がどうやら聞かずにすむ。地內儀の御意見聞く手間に野を見廻し。一寸なりとも地を廣けうと立出づる門口。弟嫁の賤機。莞爾ほや〳〵會釋こほして。御機嫌取りの追從顏。詞ムウ、是は御夫婦ながら內方にかちと御見舞と休らへば。ようこそ〳〵餘所他人でもある事か。遠慮なしにサア爰へ。蘇民樣はおまめなか。こつちに父御樣始め變る事はなけれども。只宇賀石の夜泣が今において止らぬ。ア、お前のいかい御苦勞。

ア、何のいの。腹痛まずに此方に產んで貰うた子。地それ程の苦をせいではと。娌中の睦しき巨旦將來鼻に皺よせ仔細顏。詞これ曉機。百姓の忙しい最中。爰らへ來てべらくゝと隙入れて貰ふまい。地いふ事濟んだらお歸りやれと フシ愛相なき詞つき。詞いかにも御意の通り人の手も我が手にした い時分。此方の蘇民殿作るべき田畑はお前に取らるゝ。殘つて半畝か一反に足らぬ所。一日か半日にはつい鋤きしまひ。永の日を遊んで居て行末の詰らぬ事。どうぞお情に半分ならずば。せめて三分の一田地戻して下さる樣に。五百機樣まで申せどの事。まだ此の上に添へて進上と申さば御機嫌もよい筈。地取返すと申すは御氣に入らぬと知りつゝも。言はねばならず申すも迷惑。我が物故に骨を折るとは我々夫婦。詞ヤ何がなお土產と思ひ寄る珍しき物もなし。此のお守は聞きも及びなされたか。素盞嗚尊樣寶劍とやらを失ひ。大內を追出され流浪の お姿で。二三日此方にお宿を召され。明日か明後日出雲の國へお立との事。則ち是は尊樣のお寶疫神の誓紙の手形。地是を頂戴せし人は。惡病難病を遁れ。萬の災難を拂ふお守。宇賀石の夜泣御老體の父御樣。御夫婦も戴きて息災延命なる樣に。暫しが中申し下し借受けて參りしと差出す歸の袋。巨旦將來悅び三度戴き。是ぞ內裏に傳はる三つの神寶の其の一つ。神璽と申す天下の寶。詞四五日以前雨風烈しき夕暮。蓑笠悄れし旅人一夜の宿と賴みしを。非人か又は盜人の引入れかと思ひ。叩かぬ許に叱りこくつて追出した。エ、殘り多い。聞けば素盞嗚尊蘇民が方に泊めたけな。蘇民の癡者。此の寶を奪ひ取り。帝へ上ぐれば御褒美恩賞方圖は知れぬ。是をぬつくりと持たせて置く其の律義から貧乏する。今巨旦が手に入れば招かぬ福德。此の寶を以て我も巨旦大王と呼ばれ。大國所領の主となる時。蹤は宇賀石といふ質を取られ居るゆゑ。地其の無得心からは定めて宇賀石も殺してがないへとつゝと立ち。入らんとするを五百機驚きわゝり付き。あんまりな無理無體。きたない慾心悔たうより。いつそ綺麗に盜みしたがよいわいの。サア返しやるかサア如何ぞ。エ、男をもどく出過者とはつたと蹴のめし入りければ。ヲ、踏まれうが撲たれうが非道をさせて見ては居ぬ。曉機樣恥かしい常住我儘ばつかり。明けても暮れても言合うてゐるわいの。待つて下され。取返して遣らうぞやと續いて フシ奥に入りにけり。地曉機あきれ氣も上り。エ、悔しい事をした。心を宥め田地を取る輕薄に。大事のくゝ天下に一つの御寶を借り參らせ。ふかくゝと手に渡せしは何事ぞ。詞此の身をすんぐゝに刻まれうが微塵に碎かれうが。取戻して尊樣へ差上けいで置くものか。多年の恨夫婦が胸に積れども。獨子を養はれは宇賀石といふ質を取られ居るゆゑ。地其の無得心からは定めて宇賀石も殺してがな

棄てつらう。サア其の守り戻しや。但しそれへ踏込んで聊爾をするが合點かと。思ひ切つたる面色にも我が子は如何にと四邊に目をぞ配りける。地巨旦將來宇賀石小脇に提げ。詞こりや。此のがきめ養ふも田地取らう爲。女房の腹に總領が芽づくつた。彼奴は、入らぬ連れて歸れと投出す。ヲヽ返さずとも連れて行く。此の子を取れば氣が廣い最う樂ちや。これ巨旦殿兄御殿。蘇民將來を弟と思ひ侮つても魂があるぞや。今の寶は申すに及ばず。田も畑も藪も林も。今の間に取り返して見せう。地待つていやと駈出づる。五百機走出で宇賀石が兩足しつかと抱き。待つて下され曉機樣。總領に立てんと契約で貰うた子。今戻して二人の親世間へ顏が出されうか。身にやどりし子胤を湯水と流し捨つるとも。世繼は此の子其の儘置いて我々が。一分立てゝ下され守りも何も呑みこんだ。此の五百機が返さずと引留むれば。なう恐ろしや大事の子。火焔の中から拾ひ上げたと思ふもの。片時も爰に置かうか。サアそこを放しや。イヤ放さぬと兩方義理と恩愛に。涙手詰の宇賀石がスエテ母樣なうと歎く聲。地巨旦將來守刀提げ詞ヤイ女め。胎内に總領持ちながら彼奴をとめて何にする。地放してやらずば此の餓鬼奴胴中より切放す。サア何とこりやこりや〳〵と閃かす。刃も危し放しもやらず只はあ〳〵とフシ身を冷す。地エヽあた面倒なと振上ぐる刃の影。流石は生みの母心我が子を悲しみ堪へかねて。放す拍子きる拍子二つ拍子の間遊ひに。跡を切つたる切先檢框に切込んで。拔かん〳〵と悶く間に母どつこいと掻潛り。嫂の手をもぎ放し頭の堅き宇賀石と。抱きしめ〳〵。こけつ轉んづ走り行く心。嬉しや 三重 歌在所女郎衆は皆よい聲で一に麥唄十二に茶搗唄。三に早苗唄四に仕事唄。歌で石臼かろ〳〵と。地鋤鍬の柄や長き日に畑打つ曉も肩殷きて。暖かけなる春の水井出の。樋のロフシせき入れて。田も五反田。フシ中の畦道。來る人は。地巨旦蘇民兄弟の父食保の長。齡も今年米麥の田畑見んとて鳩の杖まだ足許は若草に。上る雲雀の水鏡顏は。老いても目性よく。耳こそ少し遠山松の。霜雪經ても膝腰は。根張强なる柳蔭四方を。フシ詠めてやすらへば。地嫂五百機敷物かたげ。詞おういおういヲヽ風もなうて長閑な。去年のいつからか久しう田畠を見ぬ故に。よろり〳〵と出だれば又わつさりと氣が晴れた。堤の芝が青々と鵑蹋杜鵑花が早や咲いたの。されば〳〵梅櫻が散れば躑躅公英花は絕えぬ。氣の養生になりまする。ヤア〳〵なんといやる。アヽしんきやの。是梅や桃や櫻が散れ

ば菫蒲仝英花は絶えず。氣の養生と申す事。チ、〳〵よう知ってちや。梅干を酒鹽で喰へば痰の藥さりながら。もう此の年で養生して何にしよ。腰膝拔けず心面白い時。ころりとやれば果報々々。イヤ〳〵まだ十七八年も置きまし。腰膝立たずば抱いて歩きます。ヤ何ぢや十七八の腰元置いて抱いて寢さしよ。ハテ譯もない途でもないこといやんな。いかな蟲強い腰元も此の爺と寢たらば。破れ障子で骨ばかり味もしやゝりもおじやるまい。地なう恥かしや〳〵と笑へば嫁も噴き出し。畑うつ賤も鍬を捨て フシ腹をかゝへて笑ひけり。詞やれ〳〵をかしい親父樣。あんまり笑うて胸さきも貫さがり。地休み時いざこいとオクリ皆々へ打連れ立歸る。地四邊を見廻はしアヽ思はぬ笑に老の憂を忘れしぞ。なう面は笑へど心の底はをかしうない。詞此の堤の四方八町に五町。家に傳はる我が田地隱居の時三つに割り。二分は戀領役そなたの夫巨旦將來に讓り。三分一は弟の蘇民將來。あの樋の口から向ふの松迄一段讓りし上田。口に榮耀身に奢り皆他人の手に渡し。身代ちんふらりと聞くより内へも寄せ付けず。田地を見るも情なく此の邊足はむけねども。地今日ぶら〳〵と是へ來て。アヽ重代の田地餘所の物になしたよな。此の地の底にましますは埴安地神にも見放され參らせしと。歩み來る蹠釘針を踏むごとく。一入腸もよろめきて。無念におじやる悲しいと。涙に老を嚙みませてスエテ聲をも呑に詰らせり。地五百機ひつしと身に響き。おいとしや道理や夫の慾心一つより。弟御の憂目親御の歎き。いへば夫の惡名包むが道か云ふが道か。誰に語りて智惠をかる フシ人も涙にくれけるが。地いや〳〵夫を世上にそしらせ女の道はよも立つまじと。思ひ定めこれ申し。詞蘇民樣の讓りの田地一寸も他人へ渡らず。親御樣の御意見にて兄御より弟御へ。憐みあれば御一家素直に睦じし。地是ようお讀みなされやと地をかきならし指を筆。書付く砂のこま〳〵は磨る墨よりもあり〳〵と。一字殘さぬありのまゝオクリ盡きぬ。眞砂も フシ讀盡し。父は鬣く烏の跡。誰が呼子鳥何時の間にかは巨旦將來。後の畔の柵に突立ち。きつと見付ける眼は更にそれとも知らぬ嫁舅が。鼻の先ついたる鍬追取のべ。がはと打立て土砂かきまぜる土煙り。はつと飛びのく顏に砂。かゝる子を持ち男持つ フシ嫁舅こそ笑止なれ。地怵へ情なき無法者。女房の頬先張りこかし。詞何も知らぬ聟に男の身の上よう告口ひろいだなあ。砂に書いて見せうとは其の惡智惠を身が持てば。まだ分限になるわい。地物書くほで打折つてくれんと飛付く所を父攔みつき。元首押へてこりや畜生め。詞たつた今聞いて驚いた。數年めつほりと親をよう瞞したなあ。女房を恨みずともうぬが大惡大慾の。魂はなぜ恨みぬ。弟の田畑貪り取り。養ふとはどの親。此の親を養ふに何程の田

畑がいる。着せる着物の中入は薄蘆の穂さもしい事ながら。朝夕の膳部も五穀はあるかなし。皆像の實野老の根。地親にさへ是なれば身の始末さぞあらめ。若い者のよい合點と。苦い口を甘い顔して見せつるは。己れを人と思ひし故。可愛や弟の蘇民を裸にし。生きる間もない親に疎ませ中を斷つ。さぞや蘇民が親を恨みん不便さよ。詞宇賀石を返さばねだれ取つた大分の田畠。地何故付けては返さぬぞ。人を損ひ獨世に立ちたいとて立たれうか。地神の鳥居の二柱一人は立たぬッ教とかや。地天子の御寶八咫の鏡と申すは。詞善惡を照し給ふ神の御心。地内裏にばかりあると思ふか八咫の鏡は面々が戴く。あの天にまし〳〵て。善惡を明らめ罰も利生も頭の上に。忽ち來るとは知らざるか。詞我が背中の垢穢れ我は見ねども人は見る。地心の内も其の通り根性を直してくれ。親は他人の善人より子の惡人が可愛いと。怒ッ泣いつ氣を揉上げ。口說き歎きの親心思ひやられて哀れなり。地巨旦眉を蹙め。詞女めよう頬げたを叩いたなあ。これ親父。かう生れ付いた巨旦今更産みもなほされまい。よしない子の世話やまうより聾を苦にめされと。地叫んでも喚いても耳へはとう〳〵瀧の音。急逆せば猶聞えず。何ぢや其の面つき待つてをれ。蘇民に知らせ一國に生恥かゝせんとよろぼひ出づる畦道。サァ通つて見やと鍬よこたへ立塞がる。詞己れが遣らぬとて往くまいか。地此の道からと立戻れば又行く先を立塞ぎ。ならば手柄に通つて見やと振廻す鍬の先。父が胴骨はつたと打たれて畔の崖よりどうと落ち。絶え〳〵喘ぐ息づかひ。女房鍬に縋り付き。詞狂亂か巨旦殿。親御に疵でもついたらば雲の裏でも言譯はあるまい。地放しや〳〵と捻合ふ間に。父起きなほり箭を便りに取付き這ひ上らん。〳〵とする所を女奴放せと突退け。打つて咸すも不孝の罰の腕先狂ひ。父が耳の根がはと打込む鍬のかねや冴えたりけん。覺えず忍いと引く力水も溜らず親の首。ずんばと切れて飛んだるはッシ劍にかけたる如くなり。地女房夢の心地にてはあとばかりに絶え入れば。傍若無人の巨旦も呆れて顔の色違へ。わな〳〵顫ひうつとりと氣もッシうろ。たへて見えてけり。詞エ、恨めしい罰も答めもない物と。女房の意見を餘所に聞き今思ひ當つてか。地刃もない鋤鍬で人の首が落ちるとは。日頃の惡業惡心が積つて鍬も劍となり。親殺しの科人とは天道よりなし給ふ。又此の罪が胎内の。子に報はんあさましやと口說き。泣くこそ無慚なれ。地巨旦すんと立つて裾捻ぢからけ脚踏みしめ。詞よい〳〵胸がすわつた。皆女奴が口ばしからと取つて押伏せ。地腰の手拭口に捻込み押込み。頤かけて引括り。帶引つ解き後手に縛り上げ。詞こりやとても惡人の名を取つた此の巨旦。父の死骸を蘇民奴が畠に埋め。地科を弟に塗つてくれうと鍬提げ。善惡二

つの畦境。果は我が身の敵石地を掘返し〳〵。ほるより深き罪科の。土も砂も身にかゝる後の報いぞ　フシ恐ろしき。土搔上ぐる向ふの道。牛追うて來る人は弟の蘇民將來。ヤアこれはならぬと胸騷ぎ。骸を取つて引きおろし寄せ。血性が脱けて早い骨の硬りやうと手足押しまけ骨打折り。首投入るゝ苫の下。やう〳〵埋み踏付け踏付け搖きならし。足跡かくす畠

土。是惡業の種蒔と ァシ思ひ知らぬぞ愚かなる。 地猶も近付く牛の聲素振りでも見られては。身の一大事何處に隱れん木蔭はなし。道は一筋行くも行かれずいぬるにも稻叢の棄引退け女房引立て押入れて。上には藁を引結ひ我も木蔭を狩場の雄子のオタリ命ヘ大事と身を忍ぶ ァシ忍ばぬ世さへ。貧しきに。 地蘇民夫婦が情深く。素盞嗚尊に假の御宿參らせ。 ァシ今日出雲路に八雲立つ。道も野伺の牛の鞍。お腰を暫し掛卷も。異加の爲とナホス ァシ送り行く。 地夫が牛の綱とれば。賤機御笠蓑を持ち。主君の如く敬ひし。オクリ心のヘ内ぞ ァシ頼もしき。 地蘇民牛を引きとめ。 詞見え渡りたる此の野邊は殘らず親の讓りの我が地にて候ひしを。兄巨旦に掠められ我等の地とては是限り。兄の地を我が牛に踏ませんも如何なり。 地是よりは御徒歩にて何國迄も御供と存ずれども。兄に取られし惡鬼の手形を取返し。跡より追付き奉らん。 詞出雲の國簸の川手農業耕作怠るな。さらば〳〵と蓑笠携へ出摩乳が妻足摩乳は此の賤機が叔母なれば。かくと告げて御宿召され候べし。 地暫しも別れ奉る御名殘こそ盡きせねと。スエテ夫婦頭を地につくれば。 地尊牛より下御成つて。ァ、扨も世の人の心には品々あり。過ぎし雨の夜旅づかれ巨旦に宿を求めしに。つれなくも追出せし其の恨み。如何なればお事夫婦。斯くまで深き志。何時の世に ァシ忘るべき。我寶劍を取返し三種の神寶揃ひなば。此の恩は報ずべし。それ迄の契約一つの祕事を傳へんと。 詞畔の柳を手折らせ給ひ是を削り小札となし。紅の房を付け蘇民將來子孫なりと書付け。幼き者の襟につけよ。疫病瘧病疱瘡麻疹。一切の惡病を免るべし。 地無道の巨旦が掠取つたる疫神の手形。彼等が爲には守りとならず。其の身に災難來る事三日は過ぎまじき。正直の人にこそ守りの驗も ァシあると知れ。 地百姓をさして天の下の御寶とは天照神の御神託。跡より追付き奉らん。 詞出雲の國簸の川手農業耕作怠るな。さらば〳〵と蓑笠携へ出で給へば。夫婦は盡きぬ御名殘り。御機嫌よく御本望やがて〳〵と見送るも聲も。霞に別れけり。 詞何と女房。有難い不思議に高位のお宿を申し。蘇民將來子孫とあらば惡病難病拂ふとのお詞。末代の寶とは此の事。殊に百姓を御寶と大神宮の御託宣。耕作怠るなと結構な教へ。 地稼ぐに追付く貧乏なし。サァ〳〵油斷ならぬと素盞嗚の。牛と思ふな牛の尾もべらつきや遲い。牛の角文字急げは急ぐさせいほうせい出せば。野らの荒地も上田とオタリ妻の賤機立寄りて。 地身の上に引く田の草も茂る菜種の畦合を。一鍬かへす土の下これなうこちの人。 詞それ其の畠に人の手足が生出た。やれ竈相いふな女房と。 地ふり返つて横手を打ち。 詞こりやどうぢや。大事の畠何者の仕業と。 地鋤鍬入れて反返す瘦體。我が親ぞとも白髮首鋤にはねられ蘇民が身に。はたと當つて落ちけるをよく〳〵見れば我が父なり。 地ハァはあとばかりに鋤鍬捨て。體に抱付

きわつと泣き。顔を見てはわつと泣き如何なる娘が手にかけしと。駈出しては立戻り走出でてはどうと伏し。夫婦足ずり身を悶え。畠の土に轉び打ち大聲。あけてぞ歎きける。地巨旦將來驚いたる顔付きにて。詞ヤァ〳〵蘇民。昨夜より父が見えず人を配つて尋ねしに。見付けた〳〵親殺しの大惡人後日の罪科あらがふなとぞ罵いたる。ムゥ兄じゃ人。我殺して我が畠へ畫中に埋まうか。世話やきやるな其の五音で殺手は知れた〳〵。知れたとは誰が殺した。ヲゝ殺手はわごりよぢや。ヤァ孝行第一の巨旦に塗つたとて塗らせうかと。地爭ふ中稻叢搖皆此方の慾心から。身にも及ばぬ帝の寶を押取つて。巨旦大王といはれうなどとは口ずさみにもいふ事か。寢覺にも思ふ事かいの。地其の慾心の報いが。積り積つて切れまい鍬で親を切る。詞其の慾心のもとはといへば胎内の此の子ゆゑ。地此の子は如何なる惡人ぞ。手を出して殺さねど腹の内から親殺し祖父殺し。恨めしい子を宿したと。思へば掻き破つても捨てたいもの。まだまだと月日を待ち產落して嬉しかろうか目出度からうか。詞此方の敵は此の子ぢやが合點か。折しも稻叢に鎌のありしは。連なつた親子夫婦が罪滅せとの神の教へ天のあてがひ。死んで見せる是で心改めて。親子の者に無駄死させて下さるなと。地腹に突立て引廻す。母が誠の左鎌腰機是はと駈寄つて。留むるかひも涙の玉 ヲシ草葉の露と消えにける。地蘇民も鋤横たへこれ女房。詞命にかへぬ御守り持つてのけと聲かくれば。地腰機心得身に引つ添へ ヲシ宿所をさしてぞ走りけゑ。詞エゝ辛い慘い曲もない兄ぢや人。とつく恨みいふ事は此の蘇民も知つたれども。兄弟の禮といひ父に苦をかけまいと。地我が身一人誤つて送る月日に時節も來て。一度父の機嫌よい顔見よう〳〵の。賴みもけふにふつゝと切れ。今日から赤の他人。眞劍で出合はうか但し鋤の刄を喰ふかと詞を荒して罵つたり。詞ヤ汝に先をせられうかと。打ちかくる鍬の柄からりと受けて打拂ひ。地ひらりと廻つて打つ鋤に。巨旦が小鬢打裂かれ崖より下にどうと落つ。上手より重ねかけ打たんとする弟が。向臑くわらりと打裂き。小膝を突いて下り樣に。兄が太股猴の口程切りさけられ。のつけに返せば突懸り。臼搗打に打つ鋤が餘つて向ふへ越す所を。起直つて弟が頰先より。肩口まで引つかけて引く鍬に。よろよろ〳〵と ヲシよろめきながら。地兄が天邊を打裂けば弟も眦を打破られ。兩方數ケ所の手疵を受け。兩眼に血は入りたり。コハリ

眼は暗闇身は紅睦の簪踏み崩し。フシ堤を下りにころ〳〵どうと落ちかさなり。敲合ひ摑合ひ這上れば轉び落ち。ナホス他人まぜずの挑合ひ命限りと三重〳〵見えけるが。地兄はやう〳〵這上れば弟も息つぐ堤の原。蹣跚の花を引毫り〳〵。口に嚙んで咽濕し命を繫ぐ花の露。兄は片息草に喰付き息吐いだり。詞おのれ親殺し子殺し女房殺しやらぬ〳〵と這上るを。地畠の土砂摑みかくるを事ともせず。簪に手をかけ眞砂交りの塊を兩方摑んで打合ひしは雨か霰の三重〳〵如くなり。地賤機あるにもあられず走り來て。業人めまだ死なぬかと打ちかくる。鋤に恐れ堤をさして這下る。蘇民もすかさず這ひおりて。堤の原を西東逃ぐるも追ふも深手に弱る。上には賤機鋤を横たへ待ちかくれば。地逃ぐるに側平水なき井出の小川を越えて逃げんとす。地蘇民聲をかけ。詞やれ樋の口ぬけ女房樋をぬけ〳〵。ヲ、合點と地走廻つて女力も一世一代。貫の木に兩手をかけ。ゑいや〳〵と引く程に樋の口さつとさつ〳〵〳〵。フシ逆卷落つる。地水とう〳〵川はせばし水は高し餘つて瀨枕波枕オクリ岩も。劈く早瀨川。地渡らん樣もあら悲しやとともの畠に這上る。地蘇民追付き這上り取つて引伏せ敲きふせ吭に留めの鎌。則ち己れが妻子の敵フシ神罰の程ぞあらたなる。地蘇民夫婦は泣く〳〵も悲みは親恨みは兄。二つの涙に五百機が。哀も共に持ちごもる。三つのうつせを一つ野に。殘す形見や殘りてもかひなき。夫婦が立歸る道は涙に迷へども。身は正直の道作る鋤と鍬とは耕作の。家の寶劍御寶の。手形を登の御土產と跡を。慕ひて出雲路や。神の心も忠孝の二つを守る十寸鏡。扨こそ蘇民將來の子孫と。めぐみ給ひける。

第四　素盞嗚尊道行

舞詞さる程に素盞嗚尊。蘇民が宿を御出あり。旅より旅に出雲路や。地昨日の八重の白雲を。今日の山路と踏分くる。人目の關の關守も。咎むとしもはなけれども。心と忍ぶ。御有樣。ナホス オクリ恐れ〳〵ながらも。地水とう〳〵川はせばし水は高し餘つて瀨枕波枕オクリ岩も。劈く早瀨川。地渡らん樣影宿す露だにも漏りて溜らぬ破れ蓑。着て見よとてやフシ酒折の。山は霞の海深く。嵐渡行く落葉船水に。皺寄るおぎな川年は經れども色替へぬ黑髮。山とはあれとかや老の。鷲名に恥ぢて。聲な惜みそ眞金吹く吉備の。中山。なか〳〵に散らせし。花を春風のフシ又吹きためて。石崎や。いや高山の松が枝もオクリ二たび。花の盛り見すらん。フシ見上ぐれば。久方の。高天が原は。高くとも今の心を見行し。願ひを三つの御寶の。一つを守れ二柱天の浮橋。何時の間に。フシ我が爲辛き。途絕えして。思ひ渡らん便りさへ。長地淚千す間を暫しとて脫ぎても元の管蓋や姿ばかりはますらを。が。やたけ心を力なるオクリ梓が。柮に行きくれて見おろせば。白露江に横たはり。水光天に接はれり。スエテ子を呼ぶ猿斑鳩の聲。

岸の小笹に。刈藻掻く伏猪の騒ぐ音迄も。御心を碎く端となり。柾の葛青つゞら。フシ歩み亂れて行末に巌の鼎。江戸古木を焚き。青山雪を煎ずるに。咽を潤す便りもなく。猶人里は遠ざかり。何故急ぐ雪の脚。

嵐山風松風がばらん。〳〵と吹き音信るれば峰の。木の葉が。ハヅミざら〳〵〳〵と。ちり〳〵。ちり〳〵水の音にさへ。假寢し夢を驚かし疑ぬ夜寢ぬ夜を重ね來て。苦に片敷く袖師の浦磯に寄來る浮藻玉藻を。打混ぜてまだ。みるめ和布を打混ぜ。〳〵いろ〳〵の。フシ波や錦を敷むらん。眞砂交りの濱傳ひ。汐のされ貝空背貝。置惑はせる春の霜。フシさながら及の如くにて歩み疲るゝ。玉鉾の。矛先に向ひては。悪魔も恐れ鬼神も拉ぐ勢ひにも。御身一つの雪をさへ拂ひ。かねたる蓑笠や。身の憂き事を繰返し數へ。〳〵て思ふにも。理は持ちながら心から簸の川。上にぞ三重へ着き給ふ

歌蝶鳥の花を尋ねて塒。求むるしほらしや。蝶鳥も。花には濡るゝに。我が身は。何と榴の葉の。ナホス露にも濡れぬ獨り寢や。彈きすさみ手を盡したる。フシ大和琴。音に聞えし。地出雲の國手摩乳長者が獨子。稻田姫は此の頃熱の差引き冷め口は。お風邪召すなと花見幕。簸の川岸の櫻狩見らるる花も見る君が。姿の花にフシ恥ぢぬべし。

地旅の疲れのふら〳〵と居睡りこけし岩が根の。枕が上の物の音に尊は御目は覺めながら。ヨエテまだ寢た顔の笠の下。地瞬く眼許石叩く鶺鴒の鳥飛び來り。堤の芝に羽を休め足も尾先もせはしなく。はつと立つては又飛下り。日蔭に餐るとりぐ〳〵に。詞女房達美しい優しい鳥。彼の尾使ひのせはしなさ。地あれ程に尾を動かしてはフシ鳴くそな物ぢやと笑ひける。物をも言はず稻田姫つくぐ〵見惚れおはせしが。詞いやいや笑ふことでなし。忝くも女神男神天の浮橋に立ち給へば。あの鶺鴒の鳥來り妹背の道を敎へしより。地夫婦契りをなし初め此の萱原を產み給ひ。それより世の中の父母夫婦の道顯れ。自らや方々が。生れ出でしもフシ此のいはれ。扨こそあの鶺鴒を庭來鳴庭叩。戀敎鳥ともいふぞとよ。詞敎へても習うても殿御持たぬ自らが。地習ふかひもないわいのとても師匠になるからは。男持たしや今捕へて籠に入れ。たいじょ立して放さんと心詞もしどけなく。そろりそろりと手を上げて。押ゆればふはと立ち又押ゆればつと立つ。アヽ辛氣やとて尊の召されし笠押取り。彼方へ押へ此方へ押へ遂はへ。遂はゆる笠の羽風に恐るゝ鳥は。行き方知らず思はず知らず尊の上へ。轉びかゝれば驚き起きて。ぢつと見交す顔と顔互に頷く花薄。ほの字を中に籠らせて鳥の敎へし緣のはし。爰にも天の浮橋の。夫婦の始めとなりにける。地戀にこりたる尊の心又惚れ〳〵となり給ひ。詞御覽の如く卑しき旅人。やんごとなき上臈の人目もあるに其處退き給へと宣へども。地姫はとかうの

應答もなく。ぞつと寒氣も忽ちに顏色は朱を注ぎ五體に大熱ほとぼり出で。尊にひつしと抱きつき悶え苦しむ其の有樣。女房達も立騷ぎ尊も見捨てがたければ。手を引きかゝゝ漸うと オクリ 幕の〳〵内にぞ入り給ふ フシ母は驚き。地屏風押退け今日はよもやと思ひしに。又もや熱のさしけるよと。スエテ樣々に看病し。詞何方かは存ぜねども。旅のお方の御介抱身にも餘りて忝し。問ひとはるゝも偖遇の緣牡忽に申す事ならねど。此の國此處に八岐の大蛇とて大蛇あり。地何時の世よりか年毎に。色よき娘を人身御供に取らざれば。一在所祟りをなす。詞其の印には。山宇津木の折枝が。鳴渡つて棟木に立ち。家の柱より血潮流れ出で。其の瑞相には前方に。必ず取らるべき娘が熱病を病む知らせあり。地それ故に一在所娘持つたる者ごとに。風邪でも引いて熱させば。若し家の棟へ山宇津木が立たうかと。親々の心遣ひはいかばかり。それに此の子が熱のさし引樣々の看病勵もなし。若しもそれに極つて大蛇が餌食となるならば。二人の親はいかならん行方も知らぬ旅人に。語るも云ふも悲しさの。心に餘る故ぞとてスエテかつぱと伏して。泣きゐたる。地八岐の大蛇が物語尊とつくと聞召し。詞若しや方々は。手摩乳長者の一家の人にてはなきか。吉備の國蘇民將來が敎にて。手摩乳夫婦を尋ぬる者よと宣へば。地ナウ其の手摩乳とは夫の事。妻が名は足摩乳此の娘は稻田姫。蘇民がしるべのお方とあれば外ならぬ所緣もあり。憐み給へ旅人と又さめ。〳〵と泣く涙。地娘が苦しむ玉の汗。時雨村雨夕立の一度に降り來る如くにて。尊の旅の蓑笠も フシ重ねて濡るゝばかりなり。地尊包むに包まれず名は聞きも知つつらん。詞素蓋鳴とは我がことよ。身を燒き骨を焦す大熱なりとも。忽ち退け得させんと宣へば。地母は恐れて飛びしさり。スエテ頭を下げて敬ひける。地尊枕に立寄りて腰の御劍をするりと拔き。詞抑此の日本は日の神の御國にて。陽氣盛んにして暖かなること。天地の内に並ぶ方なき國土なり。地されば伊弉諾尊軻遇突智といふ火の神を御誕生ありし時。其の軻遇突智が火焰に燒かれて神逝りましましも。内に大熱の火を包みし故なり。詞故に日本に生るゝ者は。十六の夏迄は。兩袖の下を闕腋の脇明にして熱を漏し。涼しみを受けざれば國と人と相應せず。地然るを父母愛に溺れ。さなきだに實熱深き稚子を絹に包み綿に卷き。熱に熱を添ゆる故。寵愛却つて愁の種と フシなるぞかし。地今より日本の貴賤男女我が詞を式となし。闕腋を着せさせば。見よ〳〵無病延命疑ひあるべからず。いで其の證を見せんずと熱氣冷す氷の御劍。閉ぢたる左右の袖下さらりさらりとたつ所に。わきあけより燦り出で半天に煙滿ち〳〵て。渦卷き去ると見えけるが。顏色さめて白々と心地涼しく見えにける。末代和國闕腋は フシ此の。御神の敎

なり。地母は悦び浮き〳〵いそ〳〵前後を忘れ。ハヤヽ有難や忝や。此の稻田姫夫もなし恐れながら尊樣。御返留のお寢間の伽お宮仕に參らすべし。早う歸り夫に知らせ悅ばせん。娘は道の知邊にと立寄れば立寄つて。一首の御製にかくばかり八雲立つ。出雲八重垣。妻籠に。八重垣つくる其の八重垣を。是こそ三十一文字の歌の始や。闕腋の袖と。袖とや 三重〳〵重ぬらん ワシ宜も富みけり三枝の。三つ葉四つ葉の殿づくり築地大門つき〳〵しく。庭は自然の植込に。海を見晴らし山詩て居ながら風情を奥座敷。手摩乳長者が館には。尊の御入り稻田姫の病氣本服悅びに。猶悅びの饗應は。ワシ毎日酒宴に暮らさるゝ。地主の長者も微醉ながら蘇民將來が來りしとや。珍しや〳〵。案内どころか是へと是へと請じける。詞先づ息災で目出度いが親兄のこと聞及び。日頃の巨旦が惡心。さうあらうと思ひし事。和殿が正直天にかなひ。尊のお宿申されしは子孫の譽。尊も度々の御嘗先づ御目見えとありければ。地されば我等も數ヶ所の手疵もあひしかども。預り奉る手形守りの威德によつて。跡方もなく平癒し。御恩の尊御行末も氣遣ひ御跡より參らんと。御契約申せし故本國を打立たんとせし折箱。帝都より大山祇と申す臣尊を慕ひ奉り。我等に案内申せとの御賴み是迄お供仕る。是は又御預りの手形守り。共に御披露賴み奉るといひも敢へぬに長者悅び。詞何大山祇の臣のお出とや。天下に誰あらう瓊々杵尊の舅君。斯る邊土の我等が宅へお尋ねも。尊の御威光さぞ御悅び。地此方へ請じ奉れと ワシ勇んで奥へ入りにける。 ワシ蘇民が案内に。大山祇。家は長者が宿なれど。尊を敬ふ心にや。スエテ下座に控へておはします。地勇みいさめる手摩乳長者始めの顏色引きかへて。澁々顏にて立出で 詞ナウ蘇民。大山祇とは彼方の事な。我等は手摩乳と申す者。遙々の御出で尊へ申し上ぐる所。如何なる事にや散々の御機嫌。大山祇の臣ならば詞も交さぬ顏も見ぬ。戻せ〳〵との仰せ。我等もはつと存じ。同道の蘇民に御憎しみばし候かと。押返し問ひ申せば。情をかけし蘇民に何の恨みのあるべきぞ。丸を輕んずる大山祇何の對面追返せ。年寄つて諍い諍いと却つて我等を御叱り。お歸りと申すも迷惑。同道の蘇民も嘸迷惑。エヽ近頃地氣の毒と頭かく手摩乳長者が白髮より。 ワシ座は白けてぞ見えにける。地大山祇手を打つて。詞ハヤ御恨み思ひ當つたり。我が娘木花開耶姫に尊御心を寄せられしを。其のかひもなく帝の后に奉る。是は勅諚詮方なし。地又寶劍の失ひ給ひしも化生の業とは申し乍ら。我が娘岩長と生れ出でての災。御加勢申し此の寶劍を取返さでは未代迄の身の恥辱。此の所に骸は埋むとも一たび御目にかゝらでは。都へとては歸るまじ今一應申してたべと。思ひ込んだる兩眼に涙を。スエテはら〳〵とぞ浮めける。地洩聞えてや

女房達尊の御出と呼ばはつて。仔細は何と白綾の歩障を中に押し立つれば。大山祇力を得。主手摩乳蘇民將來ヌエテあつと頭を傾くる。始めて着なす。闕腋の田舎めかずも。フシ稲田姫。尊の仰を蒙りて。ヌエテ歩障の陰より聲作り。調ナウ大山祇。丸は素盞嗚尊ぢやぞ。寶劍を取返す力にならんとて遙々の下りか。言はれぬ事の。人頼みする程なれば流浪の身にはならぬ。丸が一人の力にて取りかへし。此の寶劍は素盞嗚尊の手から出たと。末代に名を殘して見せう。それ迄は郡の人に逢ふまいと。天照神に誓を立てたれば逢ふ事はならぬ。殊に后にも立つ開耶姫に心を懸け。上への恐れ今での後悔。其の開耶姫が親に逢つても。どうやら心が殘るやうでいな物。其の上開耶姫よりは。手近いに折りよい蕾の花があつて。寢ても起きても詠めて居る。此の蕾が情氣深うて。外の花とは一つ瓶にも活けさせぬ。蘇民は情を受けた者。其の外は別の長者ならでは對面せう所縁がない。早う往にや。往にやと。地形も見せず顔見せず詞で人に鸚鵡の鳥。梅の鶯山鳥。フシ眞似びかねたる如くなり。地母足摩乳銚子盃携へ出で。調大山祇樣とや妾こそ足摩乳。お心の本意なさ推量致し。地思ふ仔細の候へば先づ御酒一つとすゝむれば。猶心得ぬ事かなと思ひながらも長柄の銚子。一つ受けたる盃にフシ人の心を汲みにけり。調申し山祇樣。ふたりが中に稲田姫とて獨娘の候が。地尊樣へ御寢間の御伽に參らせて御不便は蒙れども。我々が娘尊の后と申さんも恐れあり。是を養子に參らすれば山祇樣は別君。是に增したる所縁なし。御本意遂げられて後親しき御對面も有るやうにと存ずるが。長者殿如何思召す。調尤々。親子の盃地善は急けと立寄つて明くる。フシ歩障の。さやかなる。雲井の人の盃に。蘇民も顔は色付きてフシお目出度やとぞ祝しける。大山祇大きに悦び。調稲田姫を我が子にして差上ぐれば勅諚も背かず。尊にも背かず此の上の本望なし。地御對面取りなしは夫婦の人に任せ置く。暫く旅宿に逗留し。吉左右を待ち申すと蘇民誘ひ立ち歸れば。稲田姫は親子の禮儀長者夫婦も式代し。オクリ別れて〳〵旅宿に歸りける。フシ時刻吹卷く。夕嵐音も崩る山宇津木。一枝虛空に鳴渡り。棟木にはつしと血煙立ち。フシ柱を朱に染めてけり。地夫婦はあつと動顛し。悲しや知らせの山宇津木が立つたわと。母も姫も絶え入れば長者も騷ぎ狼狽へなく。調ヤレ男ども女子ども。早う彼の木を取つて棄て柱を拭へ。ヤレ梯子よ次足よ。地フシ棒よ杵よと犇きける。地幣帛提げ村中舉つて數十人どか〳〵と入り來り。調コレ〳〵毎年の人身御供。何處に印立つべきと地下中手分けし窺ふ所。此の家に知らせの宇津木がお立ちなされた。例の如く人身御供へ同道し用意せん。地サア稲田姫を御渡しと呼ばはる聲々。夫婦も姫も力落ち。前に知らせの大熱は尊の

お蔭で助かれども。どうも遁れぬ命よなア。所の衆頼みます。どうぞ助けて下されとゝエテ抱き付いて。泣きゐたり。詞ハテ悪い合點な長者殿。誰が慾い目が見たからう。斯ういふ我々から來年は誰が身の上であらうやら。地合點づくでは渡されまい。サアござれと押分くる手摩乳押留め。詞粗忽せられな。我が子ならば所の法を我一人破らうか。此の子は別に親がある。たつた今大山祇といふ人に養子娘にやつた。おれが娘でないからは人身御供に立てう筈がない。地爰に置く故やかましい養子親に手渡しゝよ。娘よ來いと手を取つて駈出づれば百姓ども何處へ何處へ。詞それではそつちの勝手はよかろ。其の樣な事で濟むなれば大蛇に娘を取らるゝ者は一人もあるまい。存じの通り遲うてさへ在所中へ祟りが來る。長者殿でも手摩乳樣でも。地是ばかりは除られぬとあらけなく引立つる。夫婦は煩悶え縋りつき誤つた在所の衆。待つて下され人身御供に立てませうと。漸うに引留め娘を中に取廻し。顏つくづくと詞なくせき上げ〳〵歎きしが。足摩乳髮掻撫で。地毎年人身御供の時分になれば。若しやこちの娘にも當らうかと。幾瀬の思ひする内に。詞今年は餘所へと聞く時は。アヽ嬉しや遁れたよ。來年はどうあらうと案ずれば今年も又遁れた。嬉しや〳〵と地人の子の取らるゝを悅んだ其の報い今年といふ今年こちの身に報い來た。せめて病で死んだらば骸なりとも殘らうもの顏見せてたも稻田姫。ナウ此の美しい顏を。大蛇の餌食になすかいのと。抱きよせ咽び入り立つも立たれぬわしや足摩乳。此方にもがれた眞の手摩乳。どうしましよいのと縋付き聲も。惜ます泣きゐたり姫も。現の心なく。大蛇の餌食にならん事。悲しい上は フシなけれども。所の作法は是非もなしと諦めもあるぞかし。お年寄られた父母に長い歎きをかけまする。是が悲しいばつかりと。縋りつけば抱きよせ。涙爭ふ親子の樣。在所の者も一同に子を取られしは身に知る雨。我が身にかゝらぬ人迄も フシ袂を絞るばかりなり。地素盞嗚尊白小袖御手に提げ。とう〳〵と搖き出で。詞是こそ丸が望む時節。大蛇を討つて本意を遂げ。國の歎きを救ふべしと宣へば。百姓ども口々に。大蛇をどうした物とか思ふ。頭が八つ角が十六。眼も十六見通しの變化。男にも女にも形は自由自在の物。地殊に男たる者及物を持つたる影を見せても命がない。手に覺えあるならば減して一在所の。末代迄の難儀を救はれよ。詞必ず〳〵怪我をして恨み給ふな。アヽいはれぬ腕立。地命の懸換あるさうなと フシ一度にどつとぞ笑ひける。地知らずや我こそ天照神の弟素盞嗚尊。大蛇を討つべき我が手だてよつく聞け。如何に自由を得たりとも龍蛇は必ず酒に惑ふ。八つの甕に毒酒を湛へ。稻田姫が影を映し呑干す折を見合せて。討つになどか フシ討たざらん。詞ヤ

ア稲田姫。此の白き衣服の袂。外を圓く縫はせしは刄の反を隠さん爲。大蛇が間近く來らん時闕腋の此の所より。劍を出し腮を刺せ。地我其の時走り着き。大蛇にもせよ毒蛇にもせよ一ひしぎに取つて伏せ。奪はれし寶劍やはか取らで置くべきかと。はゝぎりの名劍を渡し給へば稲田姫。戴く劍を闕腋の袖に包んで衣がへ。太刀を一振隱せしより。闕腋を振袖とは フシ此の時よりぞ始めける。地手摩乳夫婦も生死の頼みは尊の詞の末。松にかゝれる命の露。歎の土民に引立てられ。憂をかり行く稲田姫。夫婦は涙にくれ方の時をつれなく別れの道。見返れば引立つる駈出づれば引留む。名残りを末世にとゞめくる事も愚かや稲田姫は。祇園少將井大山祇は三島の明神。開耶姫は富士權現。瓊々杵尊は外宮の相殿神と。神との振合せ袖の。縁こそ久しけれ。

第五　八雲猩々

既に時刻も夜半の雲。天を焦せる篝の煙。谷深うして響き。山水滾る簸の川上。詞八つの甕に毒酒を湛へ。影を浮べる高棚に。五重の荒菰注連を引き。地贄の少女を据ゑ置きたり。樂文無慚なるかな稲田姫。昨日迄も今朝迄もオクリお乳や。乳母に侍かれ。荒き風にも。當てぬ身をつれなく一人捨てられて。説經父よと呼べば谷の聲。母よと呼べば松の風。斯るべしとは。夢にさへいさ白小袖の振袖も。ナホス絞りかねたる フシ哀れさよ。二人地時に コハリ山鳴り震動し。谷の水音さゞなみ立ちあれ〳〵遠に雲起り。俄に降り來る雨の脚。鳴神稲妻ナホス天地を返し大蛇が姿 フシ現れたり 三人ハルフシ消ゆるとすれど。吹上けて。又山風が焚く篝。簸の川上に年を經て住めど濁るは濃き薄き。酒にもまるゝ九十九髪。亂れ心は何故ぞ。我寶劍に心をかけ。スエテ岩長姫とは生れしが。蛇道の縁は切れやらず。惡女と生れ人に笑はれ憎まれし。美女は惡女の焔の種。よしとは言はじ葦原や。スエテ八島の浦の外迄も。地眉目よき女を取盡さんと。簸の川上に隱れ棲み八つ岐の大蛇と成つて。人を取ること多年なり嬉しや今宵ぞ廻りくる〳〵姿は女。心は如何に。鬼とも蛇ともフシ見えわかず フシ見る目も暗き。心の闇。消ゆるは露より心の玉。耀く大蛇が眼の光。フシあれこそ今宵の我が贄ぞと。三人コハリ答を振上げ紅花の舌をふり立て振り立て。歩むとすれども毒酒の薫に引留められ。立寄る一つの甕の影。地実に女はあり〳〵〳〵。あり有明の。月夜にあらぬ桂女の姿は一つ。影は二つ。三人三つ四つ五つ。七つ八岐の大蛇が魂。八つの甕に八つの形。いで飲干して底なる女を。贄に取らんと飲んでも亂る酒のさゞ波。寄り來る〳〵寄せ來る面。フシ面を浸し頭を下げ。飲めども〳〵盡きせぬ泉。次第に傾く大蛇の影面色變じて茜さす。コハリ角は珊瑚の枝をふり立て忿怒の醉に足引の。山もくる〳〵野もくる〳〵踏留むればよろ〳〵。立上ればたち〳〵た

ぢ。かつぱと伏せば亂れ心は只一身。ナホス地返すぐゝも恐ろしや。三人風瀧の響きは皷。松風笛の音。雫と積りて菊水消え流れ。竹の露の甘露。月は影有明。朝霧夕霧。添へて汲むは玉水。面白の夜遊や。

歌やあん楊柳枝。楊柳枝。南天龍膽金銀花咲いた。銀杏金柑楊梅寒梅瓢簞鳳仙花。やあん皷仙花。鐵仙花。桐檀沈丁花。芙蓉林檎長春半夏草。ゑゝすゑ。ゑゝゑすりよゑゝすゑすゝりよぎこんりよう。

ゑすゝりよこんりよこんちんこんりやうこんちんかう。ころ〳〵轉び。起きては輾び。ナホス己が フシ心の戯れは。二人ハルフシ人の命の。仇敵捨てたる身さへ若しや又。遁るゝたけはと見廻せば。此處の山陰彼處の岨。八岐にまたがる大蛇が姿 コハリ東南西北四面四維。霆雷瞬く内。八つの形は顯然たり誠の女はあれこそと。執念き顔吐く息は巖を穿ち古木を倒し。落ち來る木の葉ははら〳〵〳〵。地あら腹立や〳〵コハリ僞る人の心の酒。盛りて悔ゆるとかひあるまじ思ひ知らせん思ひ知れと。八つの姿は附纏はつてくる〳〵〳〵手繰れば千尋の大蛇が形。眼は火輪炎の背。鱗を鳴らし角をふり立て雲を卷上げ卷下し。高棚ナホス目懸け蒐りしはすさまじかりける 三重〈勢ひなり。地姫はあるにもあらればこそ。死するに二つの道なしと只一筋に思ひ切り。谷へかつばと飛びおるればつれなき玉のおのづから。土手の平沙に下り立ちたり。嬉しや生きる道筋と目指すも知らぬ草の原 フシ亂れ亂れて迷惑ふ。地大蛇は怒りの鱗を立て猛火の瞳は利劍を吐き山岳草木動搖し。河水を覆し大地を蹴立て追立て追詰め 三重〈追廻り。地弱腰を引咥へ只一呑みの毒蛇の口。遁れがたなき世の譬へ フシ哀れ果敢なき有樣なり。地せきにせいたる尊の顔色眞黑になつて駈來り。姫が敵天下の仇何時まで遁し置くべきぞ。寶劍出せと身體髪膚に力を入れ。小脇にうんと抱締めゑい〳〵〳〵と引立つれば。勇力和光の勢ひ强く。弱る處をどうと投付け頭にしつかと踏跨り。劍を返せ姫返せと角を掴んで捻付くる。時に胴骨動き出で。大蛇が背を腹の内よりさら〳〵と切りさばき。稻田姫朱になつて顯れ出ゞ。尾筒に隱せし十握の寶劍やす〳〵取つて候と。右と左に寶劍利劍。二振袖に提げてにつこと笑ひし其の顔。尊御悅喜淺からず。天の叢雲の御劍と名付け大日本寶フシ揃ふぞ目出度けれ。地尊大蛇が頭より寸々に切伏せ〳〵亡し給へば。天兒屋根を先として大山祇蘇民將來手摩乳夫婦。日月の御族眞先に押立て。御迎ひの諸軍勢野に滿ち山に敷島の。歌に和らぐ君が代は八島の外の國迄も。日本の威を振袖の。人民無病延命に五穀は。家に滿ちにける。

七行大字直之正本とあざむく類板世に有といへども又うつしなる故節章の長短墨譜の甲乙上下あやまり甚すくならず三寫烏焉馬なれば文字にも又違失多かるべし全く予が直之正本にあらず故に今此の本は山本九右衛門治重新に七行大字の板を彫て直の正本のしるしを紛せよとの求にしたがひ予が印判を加ふる所左のごとし

竹本筑後掾 本竹 博敎

正本屋

山本九兵衛板（壹印）

大坂高麗橋壹丁目 山本九右衛門板 印